

追悼



故 増岡章三 会員 (4期)

2016年8月19日逝去・89歳

1967年度 東弁副会長

1978年度 日弁連事務総長

「勲章は諸悪の根源である」 弁護士会の民主的運営の基盤作りに献身された先達

会員 並木 政一 (31期)

増岡先生は、弁護士会のあるべき姿を考えると、常に導きを与えてくれる存在であった。学んだことは多い。とりわけ、1950年代から70年代の弁護士会改革に関する物語は、私に大きな影響を与えた。

東京弁護士会百年史を紐解くと、東弁や日弁連の民主化運動の歴史が記されている。増岡先生は1959年、同年代の登録10年に満たない若手を結集して期成会を立ち上げ、会派や単位会を超えた運動により、選挙会規を厳格に改めるとともに、弁護士会の民主的運営と執行力の強化に尽くされたのである。

東弁では、会館外の選挙事務所を禁止し会館内に設けさせたこと、日弁連では、会長選挙を代議員の投票制から全会員による直接選挙制に変え、さらに会長の任期を2年にして執行力を強化したことなどが重要な成果であった。

増岡先生が、私たち後輩に、当時の派閥のボス支配の実情、役員選挙での情実や利益誘導に満ちた腐敗の実態、選挙の論功行賞に基づく人事の弊害を伝える語り口は、いつもユーモアと臨場感に溢れており、興味をそそられた。

東弁の役員選挙では、休日の朝、まだ寝ぼけ眼の若い弁護士が住んでいるアパートを、候補者と数人の取り巻きが黒塗りのハイヤーで乗り付けて高級ウイスキーを配っていたこと、料亭を借り切って酒食を供応していたこと、会長が論功行賞として管財事件や国選事件を配っていた様子などを、身振りを交えて話され、大きな笑いをとっていた。

晩年、話題にしたのは日弁連会長選挙をめぐる一場面である。次期会長に意欲を燃やす二人の候補者で話し合いが持たれたが、いずれも譲らないまま決着せず、終にはくじ引きで順番を決めることとした。ところが次に、くじを引く順番が問題となり、それをジャンケンで

決したというものであった。勲章(名誉)欲しさに談合してなった会長がいい仕事をするはずはなく、増岡先生は、常々、弁護士会の選挙や人事を悪くしてきた要因は勲章にあると喝破されていた。

また、あるときは、一弁の会員室で若い弁護士が奥の椅子に座っていると、「君たちの座る席ではない」と注意される場面の目撃談を、何度も面白く語ってくれた。今の若い人には理解できないかもしれないが、そのような時代もあったのである。

日弁連事務総長を務められた時代は、「弁護人抜き裁判特例法案」の廃案を求める活動に追われていたが、法案の危険性を説く語りは、「あなたが逮捕されたときに、弁護士が付かずに裁判が行われることを想像して欲しい」と、国会議員の恐怖心を煽るものであったらしい。

会務を離れては、やさしい父親のような存在であった。ゴルフを教えて頂いたり、新宿歌舞伎町のバーに連れて行ってもらったこともある。吉野家の再建に係っていた時期に、経営陣に提案したという高級牛丼店でご馳走になったことも思い出の一つである。私の両親の葬儀の際には、いずれも遠方にも拘らず通夜に参列をいただくなど、情にも篤い大先輩であった。

2年ほど前に足元が不自由になられるまで、増岡先生を中心とした先輩方の昼食会にご一緒していた。私が、若手弁護士を取り巻く環境や弁護士会の現状を説明すると、「隔世の感があるな」と言いながら、「自分たちが活動した昔はよかった。改革に邁進できて成果もあがった。幸せな弁護士人生だった」と振り返られていた。これが私には最後の言葉として残っている。

いま私たちが当たり前のように享受している弁護士会の民主的運営の基盤を作られた功績に感謝しつつ筆を終え、ご冥福をお祈りする。